

国内の畜産物の需給動向

牛肉

6年2月の牛肉生産量、前年同月比1.5%増

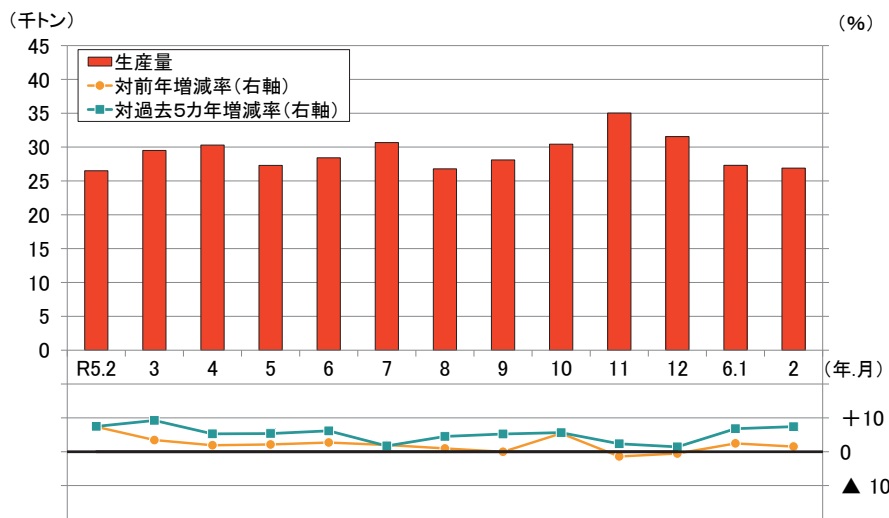
生産量

令和6年2月の牛肉生産量は、2万6904トン（前年同月比1.5%増）と前年同月をわずかに上回った（図1）。品種別では、和牛は1万2896トン（同6.9%増）とかなりの程度、交雑種は7268トン（同1.3%増）と

わずかに、いずれも前年同月を上回った一方、乳用種は6479トン（同5.2%減）とやや前年同月を下回った。

なお、過去5カ年の2月の平均生産量との比較では、7.4%増とかなりの程度上回る結果となった。

図1 牛肉生産量の推移



資料：農林水産省「食肉流通統計」
注：部分肉ベース。

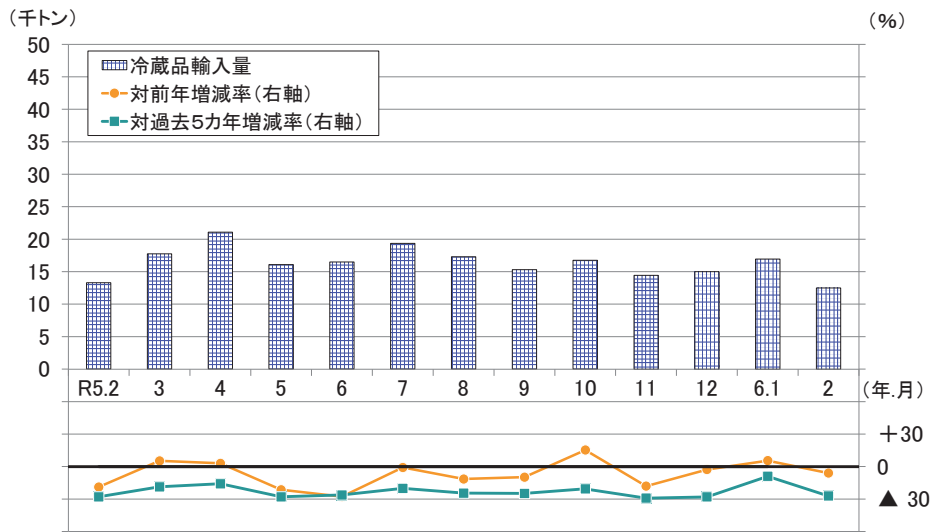
輸入量

2月の輸入量は、国内需要は低迷下にある中、現地相場の高騰による米国産輸入量の大幅な減少などから、冷蔵品は1万2500トン（前年同月比6.1%減）とかなりの程度、冷凍品は1万8486トン（同25.0%減）と大

幅に、いずれも前年同月を下回った（図2、3）。この結果、全体でも3万1010トン（同18.4%減）と前年同月を大幅に下回った。

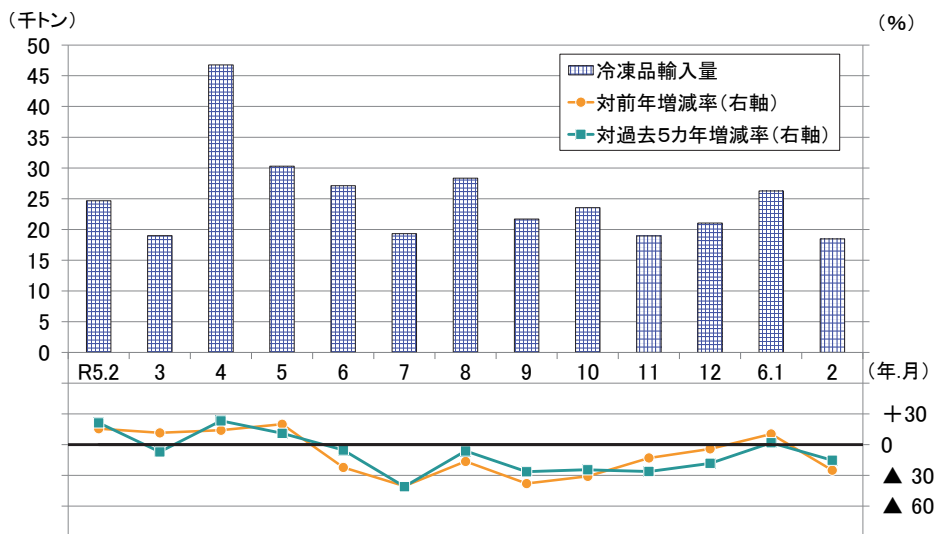
なお、過去5カ年の2月の平均輸入量との比較では、冷蔵品は27.1%減と大幅に、冷凍品は15.3%減とかなり大きく、いずれも下回る結果となった。

図2 冷蔵牛肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

図3 冷凍牛肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

家計消費量等

2月の牛肉の家計消費量(全国1人当たり)は143グラム(前年同月比6.2%減)と前年同月をかなりの程度下回った(総務省「家計調査」)。

なお、過去5カ年の2月の平均消費量との比較では、13.9%減とかなり大きく下回る結果となった。

2月の外食産業全体の売上高は、うるう年で営業日が1日増え、休祝日の連休が2回あったが、基本的には1月の傾向と大差なく、全体的にはコロナ禍からの持ち直し傾向が堅調に続いているほか、訪日外客数はコロナ禍以降最多となるなど引き続きインバウンド需要が好調で、前年同月比11.4%増と前年同月をかなり大きく上回った(一般社団法人日本フードサービス協会「外食産業市場動

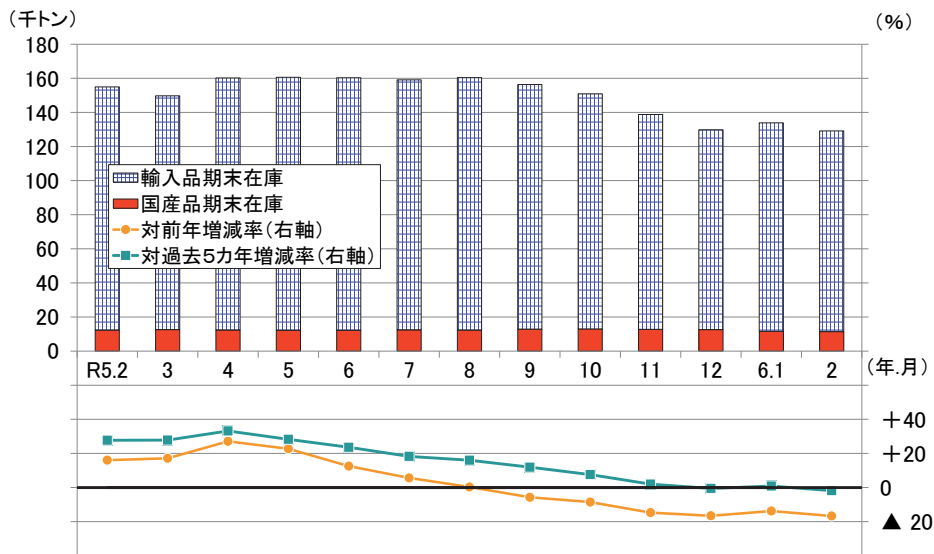
向調査))。このうち、食肉の取り扱いが多いとされる業態として、ハンバーガー店を含むファーストフードの洋風は、29日の肉の日キャンペーンなどが好調で、同8.0%増と前年同月をかなりの程度上回った。また、牛丼店を含むファーストフードの和風も、新商品やアニメとのコラボ商品などが好調で、同19.8%増と前年同月を大幅に上回った。ファミリーレストランの焼き肉は、引き続き食べ放題業態の好調と観光地のインバウンド増で、同14.4%増と前年同月をかなり大きく上回った。

推定期末在庫・推定出回り量

2月の推定期末在庫は、12万9108トン（前年同月比16.7%減）と前年同月を大幅に下回った（図4）。このうち、輸入品は11万7666トン（同17.5%減）と前年同月を大幅に下回った。

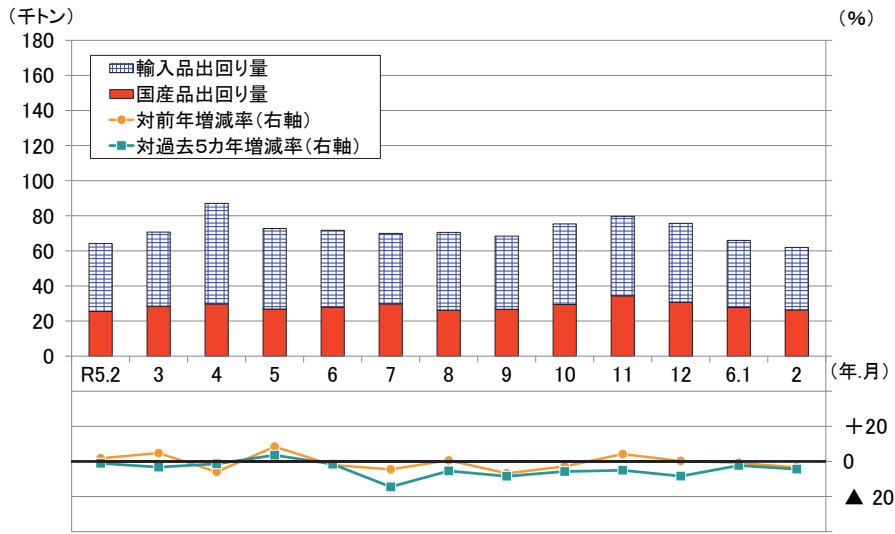
推定出回り量は、6万1968トン（同3.4%減）と前年同月をやや下回った（図5）。このうち、国産品は2万6385トン（同3.6%増）と前年同月をやや上回った一方、輸入品は3万5582トン（同8.0%減）と前年同月をかなりの程度下回った。

図4 牛肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図5 牛肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

(畜産振興部 丸吉 裕子)

豚 肉

6年2月の豚肉生産量、前年同月比6.3%増

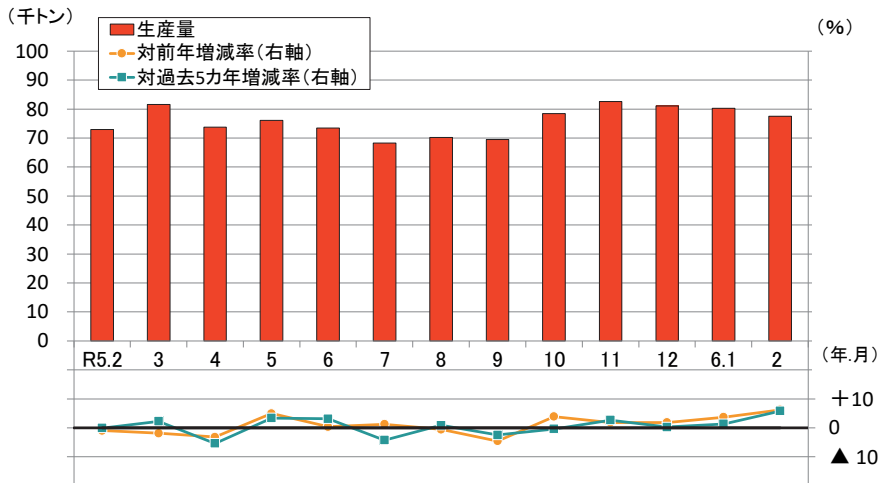
生産量

令和6年2月の豚肉生産量は、7万7558トン（前年同月比6.3%増）と前年同月を

かなりの程度上回った（図1）。

なお、過去5カ年の2月の平均生産量との比較でも、5.9%増とやや上回る結果となった。

図1 豚肉生産量の推移



資料：農林水産省「食肉流通統計」

注：部分肉ベース。

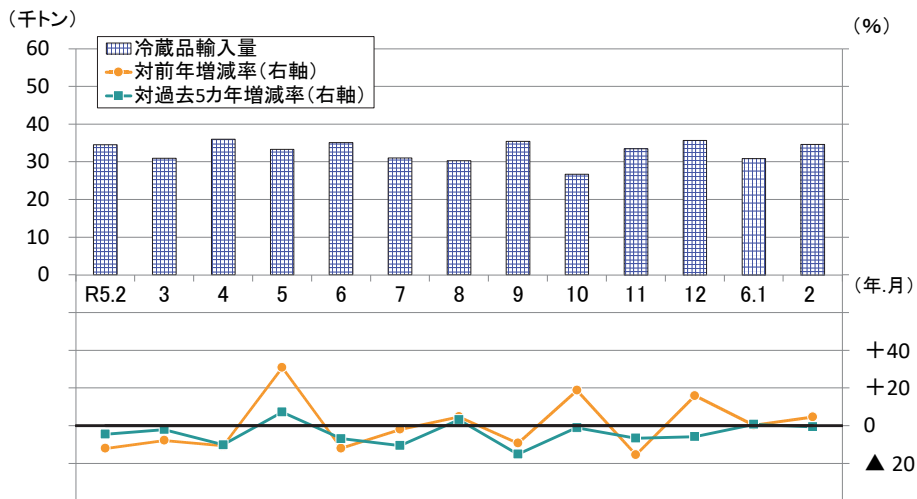
輸入量

2月の輸入量は、冷蔵品は、前年のカナダ産の輸入量が入船遅れの影響により少なかったことなどから、全体では、3万2328トン（前年同月比4.6%増）と前年同月をやや上回った（図2）。冷凍品は、紅海周辺の情勢悪化による物流の混乱などにより、欧州産の輸入量が減少したことなどから、3万2173

トン（同20.3%減）と前年同月を大幅に下回った（図3）。この結果、全体では6万4527トン（同9.4%減）と前年同月をかなりの程度下回った。

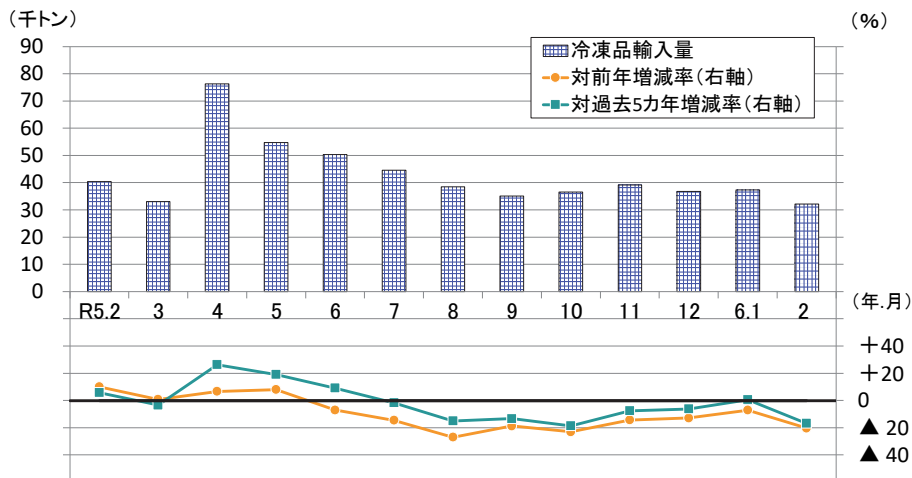
なお、過去5カ年の2月の平均輸入量との比較では、冷蔵品は0.5%減とわずかに、冷凍品は16.8%減と大幅に、いずれも下回る結果となった。

図2 冷蔵豚肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

図3 冷凍豚肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

家計消費量

2月の豚肉の家計消費量(全国1人当たり)は、652グラム(前年同月比5.3%増)と前年同月をやや上回った(総務省「家計調査」)。

なお、過去5カ年の2月の平均消費量との比較でも、6.8%増とかなりの程度上回る結果となった。

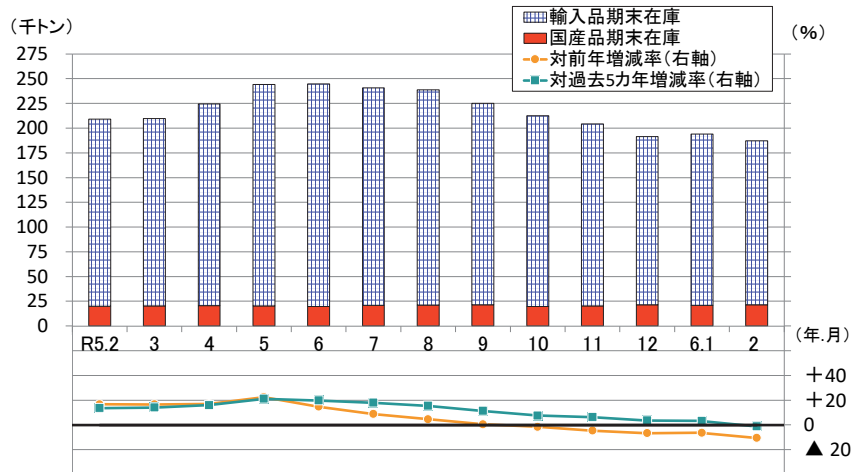
推定期末在庫・推定出回り量

2月の推定期末在庫は、18万7125トン

(前年同月比10.5%減)と前年同月をかなりの程度下回った(図4)。このうち、輸入品は、16万5686トン(同12.4%減)と前年同月をかなり大きく下回った。

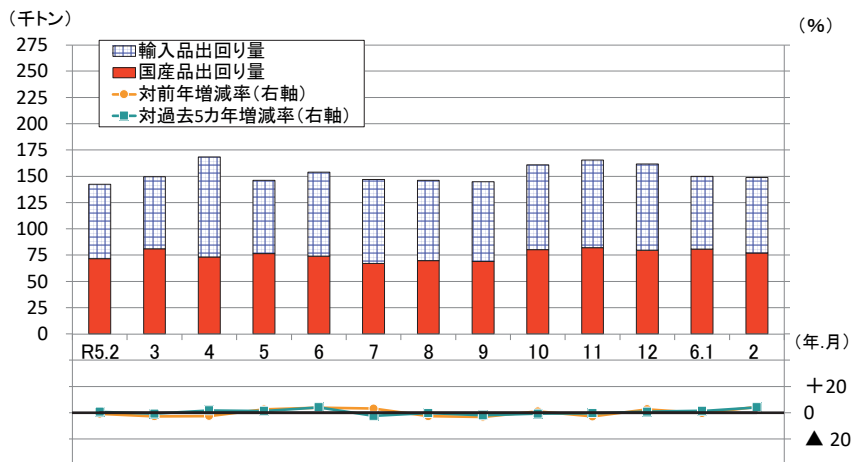
推定出回り量は、14万8866トン(同4.6%増)と前年同月をやや上回った(図5)。このうち、国産品は7万6853トン(同7.5%増)とかなりの程度、輸入品は7万2013トン(同1.7%増)とわずかに、いずれも前年同月を上回った。

図4 豚肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図5 豚肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

(畜産振興部 小森 香穂)

鶏肉

6年2月の鶏肉生産量、前年同月比7.9%増

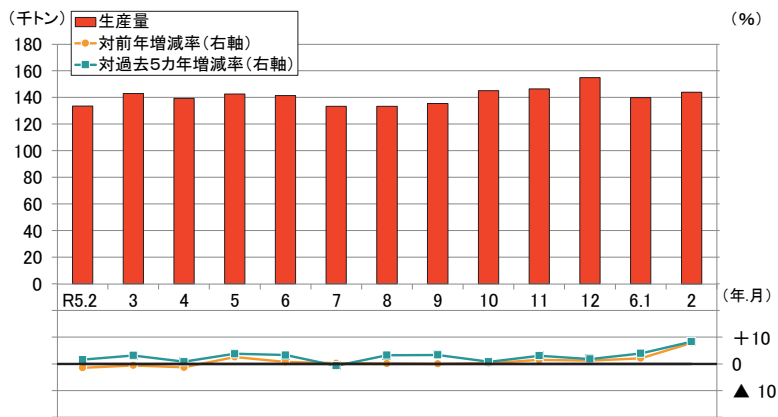
生産量

令和6年2月の鶏肉生産量は、14万4064トン（前年同月比7.9%増）と前年同月を

かなりの程度上回った（図1）。

なお、過去5カ年の2月の平均生産量との比較でも、8.3%増とかなりの程度上回る結果となった。

図1 鶏肉生産量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ
注1：骨付き肉ベース。
注2：成鶏肉を含む。

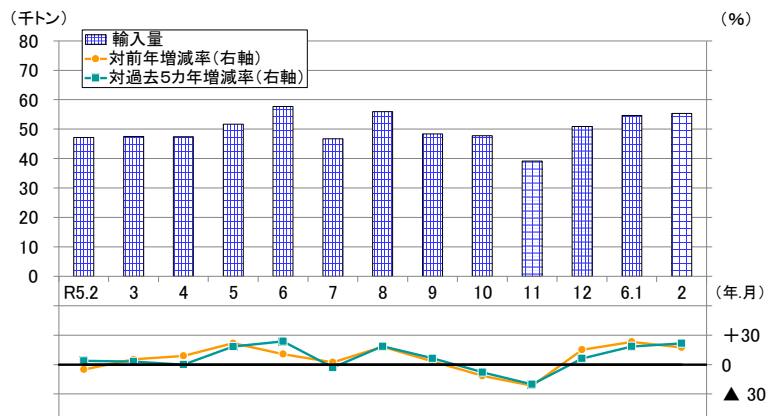
輸入量

2月の輸入量は、ブラジル産については同国において発生した高病原性鳥インフルエンザ（HPAI）の影響からの輸入回復などに加え、タイ産への引き合いも増えていることに

より、輸入量が増加したことなどから、5万5395トン（前年同月比17.6%増）と前年同月を大幅に上回った（図2）。

なお、過去5カ年の2月の平均輸入量との比較でも、21.7%増と大幅に上回る結果となった。

図2 鶏肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：鶏肉以外の家きん肉を含まない。

家計消費量

2月の鶏肉の家計消費量(全国1人当たり)は、555グラム(前年同月比9.2%増)と前年同月をかなりの程度上回った(総務省「家計調査」)。

なお、過去5カ年の2月の平均消費量との比較でも、19.2%増と大幅に上回る結果となった。

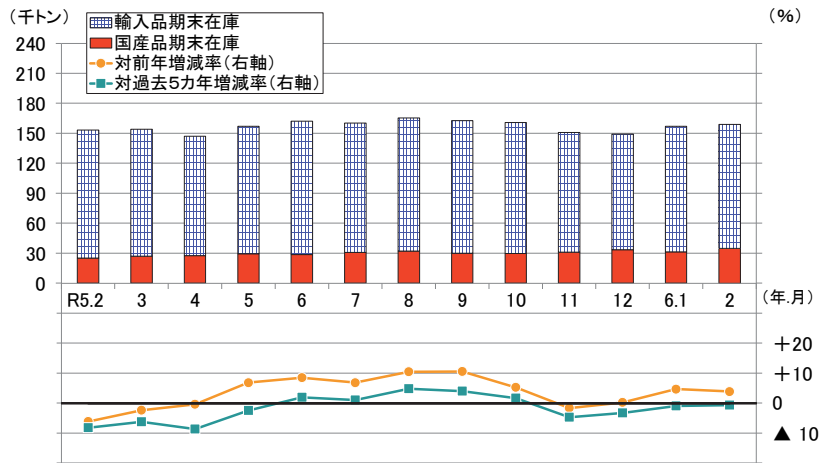
推定期末在庫・推定出回り量

2月の推定期末在庫は、15万9005トン

(前年同月比3.9%増)と前年同月をやや上回った(図3)。このうち、輸入品は12万4137トン(同3.1%減)と前年同月をやや下回った。

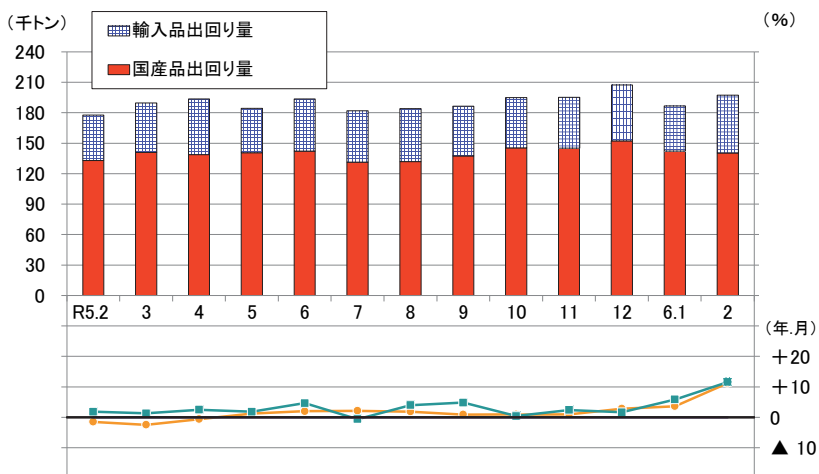
推定出回り量は、19万7483トン(同11.2%増)と前年同月をかなり大きく上回った(図4)。このうち、国産品は14万348トン(同5.5%増)とやや、輸入品は5万7135トン(同28.1%増)と大幅に、いずれも前年同月を上回った。

図3 鶏肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図4 鶏肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

(畜産振興部 大西 未来)

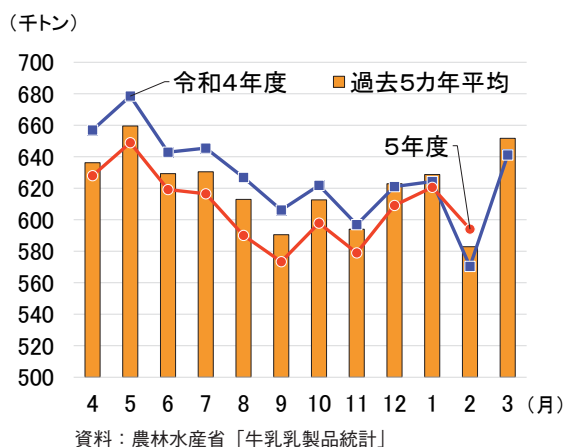
牛乳・乳製品

6年2月の北海道の生乳生産量、前年同月比5.5%増

全国の生乳生産量、19カ月ぶりに前年同月を上回る

令和6年2月の生乳生産量は、59万4058トン（前年同月比4.1%増）と前年同月をやや上回り、19カ月ぶりに前年同月を上回った（図1）。地域別に見ると、北海道は33万5472トン（同5.5%増）と前年同月を2カ月連続で上回り、都府県は25万8586トン（同2.4%増）と前年同月をわずかに上回った。本年がうるう年だったこともあり、各地域ともに前年同月を上回る結果となった。

図1 生乳生産量の推移



2月の生乳処理量を用途別に見ると、牛乳等向けは、30万15トン（同1.6%増）と前年同月を18カ月ぶりに上回った。このうち、業務用向けについては、2万4124トン（同10.2%増）と前年同月をかなりの程度上回った。

乳製品向けは、28万9919トン（同6.9%増）と前年同月をかなりの程度上回った。こ

れを品目別に見ると、クリーム向けは、5万8122トン（同7.6%増）と前年同月をかなりの程度上回り、チーズ向けは、3万5874トン（同2.9%増）と前年同月をわずかに上回った。脱脂粉乳・バター等向けは、15万3246トン（同7.9%増）と前年同月をかなりの程度上回った（農畜産業振興機構「交付対象事業者別の販売生乳数量等」）。

2月の牛乳等の生産量を見ると、飲用牛乳等のうち、牛乳は24万2421キロリットル（同1.8%増）と前年同月をわずかに上回った。成分調整牛乳は1万7183キロリットル（同4.9%減）と前年同月をやや下回り、加工乳は、1万1675キロリットル（同8.2%増）と前年同月をかなりの程度上回った。

乳製品のうち、クリームは9914トン（同7.9%増）と前年同月をかなりの程度上回った。

2月のバター生産量、前年同月比6.7%増

2月のバターの生産量は、6298トン（前年同月比6.7%増）と前年同月をかなりの程度上回り、18カ月ぶりに前年同月を上回った（図2）。出回り量は7111トン（同8.2%減）と前年同月をかなりの程度下回った（農畜産業振興機構調べ）。2月末の在庫量は、2万3228トン（同24.3%減）と前年同月を大幅に下回ったが、2カ月連続で前月を上回った（図3）。

図2 バターの生産量の推移

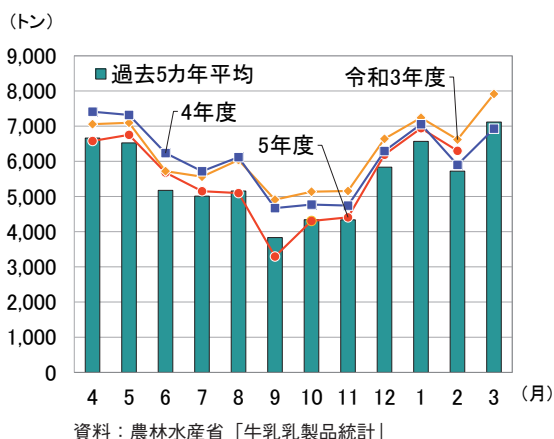


図4 脱脂粉乳の生産量の推移

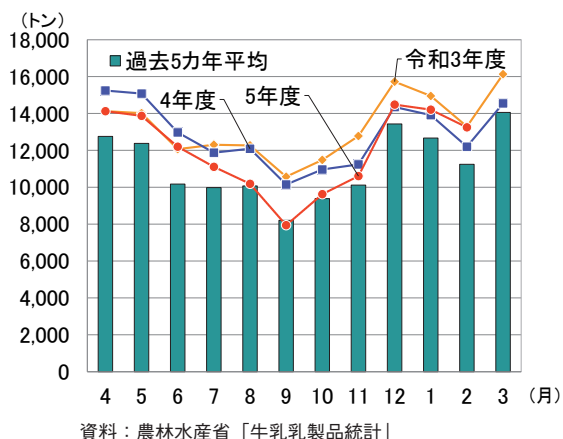


図3 バターの在庫量の推移

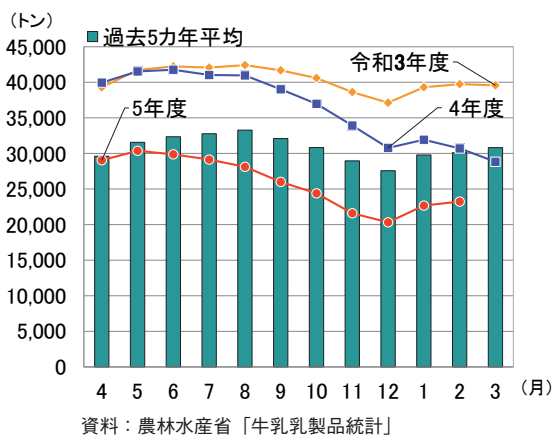
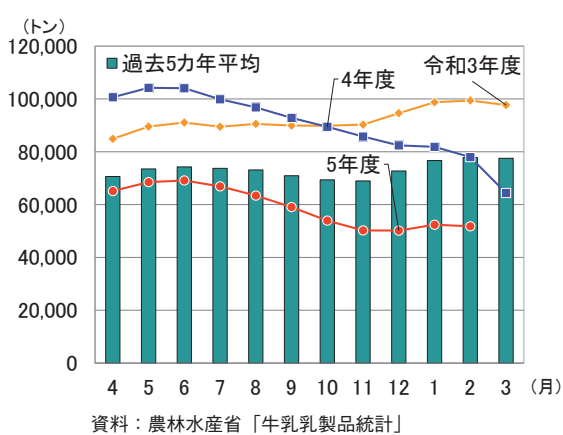


図5 脱脂粉乳の在庫量の推移



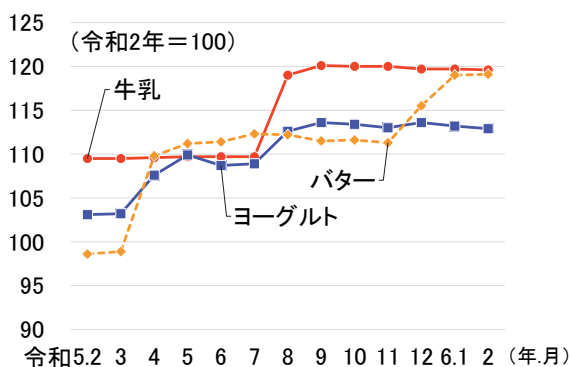
2月末の脱脂粉乳在庫量、前年同月比33.6%減

2月の脱脂粉乳の生産量は、1万3250トン（前年同月比8.6%増）と前年同月をかなりの程度上回った（図4）。出回り量は1万3944トン（同13.2%減）と前年同月をかなり大きく下回った（農畜産業振興機構調べ）。2月末の在庫量は、5万1785トン（同33.6%減）と前年同月を大幅に下回った（図5）。

2月の牛乳の消費者物価指数、前年同月比9.2%上昇

総務省が令和6年3月22日に発表した2月の消費者物価指数（令和2年＝100）によると、牛乳は119.6（前年同月比9.2%上昇）、ヨーグルトは112.9（同9.5%上昇）、バターは119.1（同20.8%上昇）といずれも前年同月を上回った（図6）。それぞれ、5年8月の飲用向けおよびはち酵乳向け乳価引き上げ、4月と12月の加工用向け乳価引き上げに伴う価格改定の時期に上昇する動きがみられた。

図6 消費者物価指数の推移



資料：総務省「消費者物価指数」

(酪農乳業部 山下 侑真)

鶏卵

6年3月の鶏卵卸売価格、3カ月ぶりに200円台に

令和6年3月の鶏卵卸売価格（東京、M玉基準値）は、1キログラム当たり211円（前年同月差132円安、前年同月比38.5%安）と高値で推移した前年同月を大幅に下回ったものの、2カ月連続で上昇し、3カ月ぶりに200円台となった（図1）。

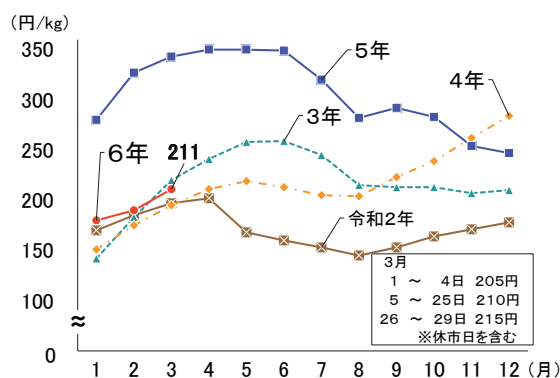
例年、同価格は年明けに下落し、春先に向けて再び上昇する傾向があり、本年もここまで同傾向で推移している。なお、日ごとで見ると、同価格は、月初の同205円から、下旬には同215円まで2回上昇し、月間の上昇幅は10円となった。

供給面は、引き続き順調な出荷が続き、今後も安定した供給が期待される。

需要面では、従来、卵を大量に使用してきた食品加工メーカーなどで、高病原性鳥インフルエンザ（以下「HPAI」という）の影響による卵の供給制限や同価格の高止まりなどを背景に商品の販売休止や代替品の商品開発などが進められてきており、業務加工用需要

の回復に一定の時間を要すると見られている。

図1 鶏卵卸売価格（東京、M玉）の推移



資料：JA全農たまご株式会社「相場情報」

注：消費税を含まない。

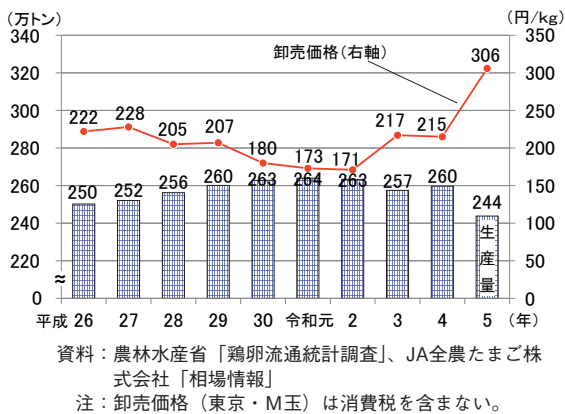
令和5年の鶏卵生産量、前年比6.1%減、この10年で最少

農林水産省が令和6年3月26日に公表した「鶏卵流通統計調査」によると、令和5年（1～12月）の鶏卵生産量は243万7773トン（前年比6.1%減）と前年をかなりの程度

下回り、この10年で最も少なかった（図2）。

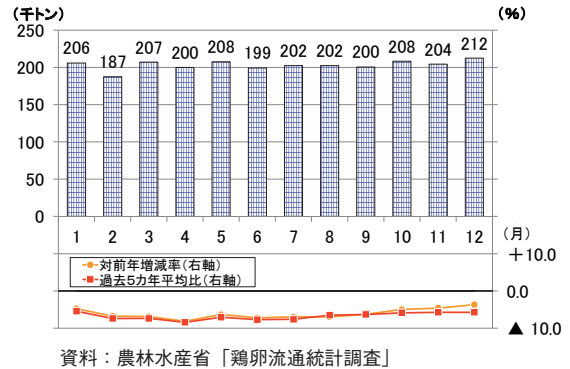
鶏卵生産量は、平成27年以降、家庭用、業務加工用ともに需要が旺盛であったことなどから、増加傾向で推移してきた。しかし、令和5年は4年10月以降に発生したHPAIが全国的に感染拡大し、その影響を受けて生産量が減少した。

図2 鶏卵生産量および卸売価格の推移



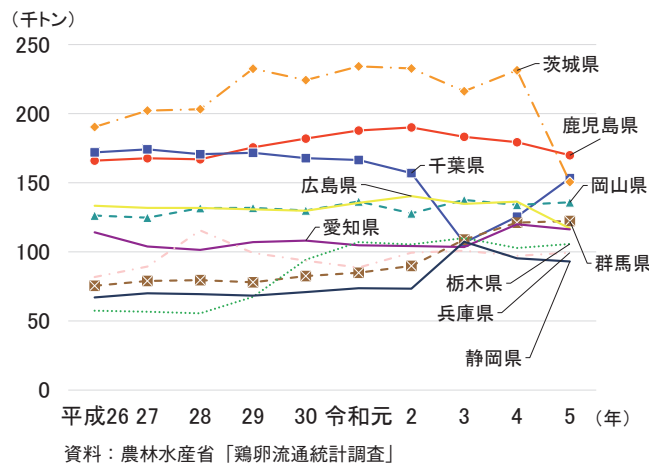
5年の鶏卵の月別生産量の推移を見ると、HPAIの影響による採卵鶏の減少などによる生産量の落ち込みがみられたが、その後、HPAIの発生農場において再導入が進み、12月には年内で最も生産量が増えた（図3）。

図3 令和5年の鶏卵の月別生産量の推移



都道府県別の上位5県の鶏卵生産量を見ると、最大の生産地は鹿児島県で16万9898トン（前年比5.3%減）となった（図4）。前年の2位から1位に上昇したものの3年連続で前年を下回った。第2位は千葉県（前年5位）で、15万3324トン（同22.2%増）と2年連続で前年を上回った。第3位は茨城県（前年1位）で15万562トン（同34.9%減）と前年より大幅に減少した。第4位は岡山県（前年4位）で13万5838トン（同1.4%増）、第5位は群馬県（前年6位）で12万2337トン（同1.0%増）となった。

図4 上位10県の鶏卵生産量の推移



（畜産振興部 生駒 千賀子）

令和5年(1～12月)の食肉の家計消費動向

令和4年に引き続き、外食需要は好調に推移

令和5年は、新型コロナウイルス感染症(COVID－19)が国内で初めて確認されてから4年目を迎えた。同年3月にはマスクの着用が個人の判断に委ねられ、5月には5類感染症に移行するなど、COVID－19による行動制限が解除へと進み、「ポストコロナ」期へ移行した。日本チェーンストア協会が12月に公表した「2023年チェーンストア10大ニュース」には、「新型コロナウイルス感染症、5類へ移行」の他、「物価高騰、食料品、電気料金等の相次ぐ値上げ」「ウクライナ侵攻、イスラエル・パレスチナ問題等地政学リスク」「物流2024年問題への対応」など、多岐にわたるトレンドが家計消費に影響をもたらした。多岐にわたるトレンドが家計消費に影響をもたらした。多岐にわたるトレンドが家計消費に影響をもたらした。

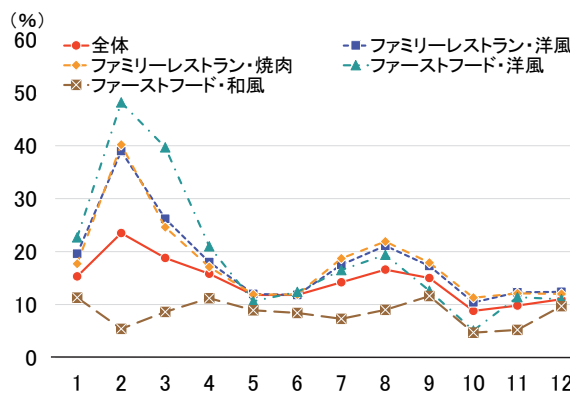
一般社団法人日本フードサービス協会の「外食産業市場動向調査(令和5年(2023年)年間結果報告)」によると、5年の業界全体の売上高は、全店ベースで前年比14.1%増

となり、2年連続の増加となった(図1)。

同調査によると、4月に入国制限などの水際対策が終了し、訪日外客数が回復してインバウンド需要が拡大したことが売上増の一因となった。しかしながら、売上の回復は「客単価の上昇」によるところが大きく、「客数」についてはまだCOVID－19の影響のなかった元年の水準までには回復していないと推定している。また、「人手不足の常態化」など、外食産業を取り巻く環境は、「ポストコロナ」となっても依然厳しい状況が続いているとした。

業態別に見ると、「ファミリーレストラン」(前年比17.5%増)、「ディナーレストラン」(同22.7%増)、「喫茶」(同20.6%増)、「パブレストラン/居酒屋」(同34.9%増)などの店内飲食業態は、回復基調にあるものの、元年比で見ると「ファミリーレストラン」(元年比1.1%減)、「ディナーレストラン」(同6.4%減)、「喫茶」(同3.8%減)、「パブレストラン/居酒屋」(同33.5%減)などで、COVID－19発生以前の水準には回復していない。一方、「ファーストフード」

図1 令和5年における外食産業の業態別売上高の推移(前年同月比)



資料：一般社団法人日本フードサービス協会「外食産業市場動向調査」
注1：消費税を含まない。
注2：既存店ベース。

(前年比10.4%増、元年比20.1%増)は、COVID-19による行動制限がなくなった後もテイクアウトとデリバリーの定着などで好調を維持している。

日本チェーンストア協会の「チェーンストア販売統計」によると、5年の総販売額は、前年比2.4%増となり、4年連続の増加となった(図2)。

同統計によると、同年1月は行動制限のない年始であり、帰省需要なども見られたことから、食料品は、買い控え傾向の高まりが見られたもののみならずの動きで推移し、衣料品は季節商品の動きが良く、住関連も旅行・帰省需要関連商品の動きがまずまずの動きであった。2月以降も衣料品、住関連はまずまずの動きで推移する一方、食料品は、節約志向による買い控え傾向から苦戦したが、4月以降は店頭価格の上昇により売上は伸びた。

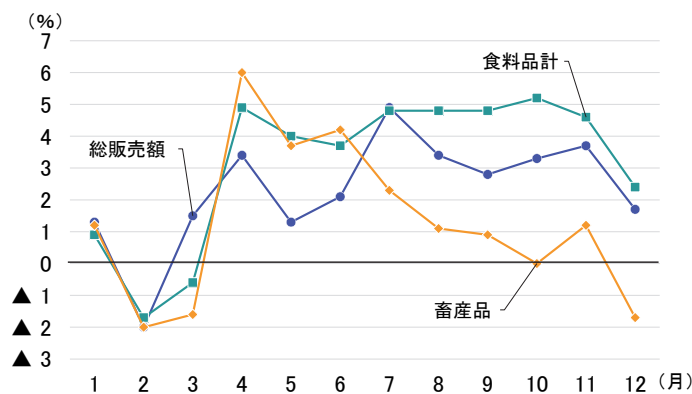
以上の結果から、カテゴリー別に見ると、

「食料品」(前年比3.1%増)およびその内数である「畜産品」(同1.2%増)、「衣料品」(同0.9%増)、「住関連品」(同3.8%増)といずれも前年を上回った。

また、一般社団法人全国スーパーマーケット協会の「スーパーマーケット白書(2024年版)」(以下「スーパー白書」という)によると、伸び率の高くなったカテゴリーとして、日配^(注1)、次いで惣菜が挙げられた。日配カテゴリーでは買上点数の減少幅が小さい中、値上げが相次ぎ、客単価が上昇し、販売額が底上げされた。惣菜カテゴリーでは、エネルギー高騰、食用油や調味料の値上げにより揚げ物を筆頭に家庭での調理を避ける傾向が続く他、行事や行楽・イベントの再開による需要の拡大も追い風となった。

(注1)「毎日店舗に配送される食品」の略で店舗に毎日配送される商品のこと。

図2 令和5年におけるチェーンストアの部門別売上高の推移(前年同月比)



資料：日本チェーンストア協会「チェーンストア販売統計」
注：店舗調整後。

家計消費のうち外食費が2割近くの増加

総務省の「家計調査」によると、令和5年の家計消費(全国1人当たり)は、「加工肉」が6429円(前年比1.7%増)、「生鮮肉」は2万7521円(同2.3%増)とわずかに、「調

理食品」は5万2372円(同5.0%増)とやや、いずれも前年を上回った他、「外食」については5万9876円(同18.0%増)と前年を大幅に上回った(図3)。

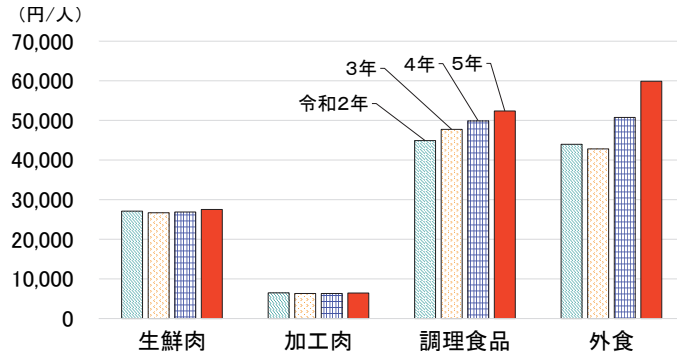
農林水産省の「令和4年度食料・農業・農村白書」によると、2年の3月以降、

COVID - 19の感染拡大の影響で食料消費支出に占める生鮮食品の割合の上昇と、外食の割合の低下が顕著になっており、その後、外食は感染の状況などに応じて回復と低下を繰り返していた。5年の「家計調査」を見る

と、内食^(注2)需要はそのまま継続しつつ、外食需要は元年（5万9568円）を上回った。

(注2) 家庭内で素材から調理して食事をする事。また、その食品のこと。

図3 品目別の家計消費（購入金額）の推移



資料：総務省「家計調査」
 注1：1世帯当たりの数値を当該年の世帯人数で除して算出。
 注2：消費税を含む。
 注3：贈答用など自家消費以外のものを含む。

食肉、食肉加工品ともに購入数量は減少、消費者の食に対する節約志向が顕著に

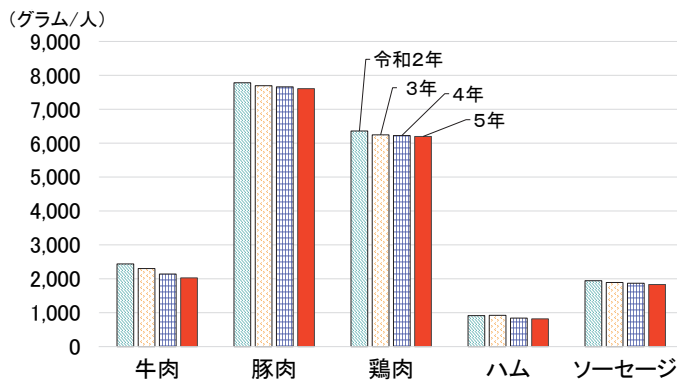
令和5年の食肉の購入数量を畜種ごとに見ると、「牛肉」は2026グラム（前年比5.4%減）、「豚肉」は7608グラム（同0.7%減）、「鶏肉」は6197グラム（同0.4%減）と、い

ずれも前年を下回った（図4）。

食肉加工品についても、「ハム」は819グラム（同2.7%減）、「ソーセージ」は1831グラム（同2.0%減）と、いずれも前年を下回った。

スーパー白書によると、物価上昇時の消費者意識として、節約対象に挙げる支出は食料品が上位を独占した。具体的に節約した

図4 食肉の種類別の家計消費（購入数量）の推移



資料：総務省「家計調査」
 注1：1世帯当たりの数値を当該月の世帯人数で除して算出。
 注2：贈答用など自家消費以外のものを含む。

対象のランキングでも1位は「野菜」（同4.2%増）、2位は「お肉・お魚」（同3.2%増）、3位は「お菓子・デザート」（同2.4%増）となっている。消費者にとって食品は、価格上昇が及ぼす家計への影響の大小に関わらず購入頻度が高く、もともと節約行動の対象になりやすい傾向にあるが、5年もこの傾向が顕著であった。

牛肉：豚肉、鶏肉への需要シフトが続く

牛肉の消費構成は、家計消費が減少する一方、**外食・中食^(注3)**への仕向け量が拡大する傾向にあり、近年は、外食・中食での消費が全体の消費量の約6割、家計消費が約3割、加工仕向けが1割弱で推移している。

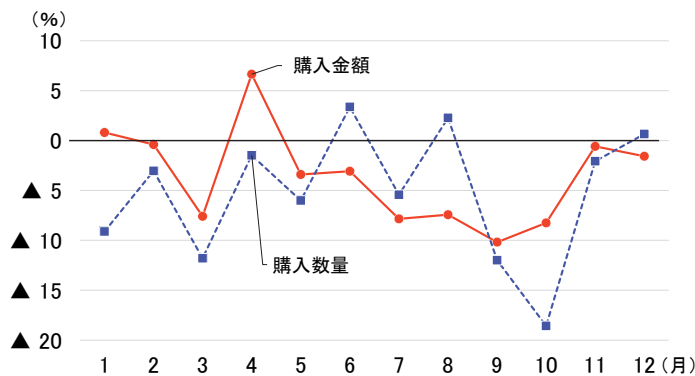
牛肉の令和5年の家計消費（全国1人当たり）を見ると、購入金額は、1月および4月を除き、前年を下回って推移した（図5）。

購入数量は、6月、8月および12月を除き、前年を下回って推移した。

スーパー白書によると、8月は国産牛肉価格が落ち着き、お盆時期の焼肉需要、週末の高単価商品が好調であり、12月も年末商戦でのしゃぶしゃぶ、すき焼き用のブランド牛、和牛肉の売り上げは好調であった。しかしながら、その他の時期は、バーベキューや焼肉用の需要が見られる時期もあったものの、1年を通してみれば、国産品、輸入品いずれも相場が高かったため、動きが鈍く、牛肉から豚肉、鶏肉へ需要がシフトする傾向が続いていた。前年と比較すると、購入単価は上昇したものの、購入数量の減少が大きく、購入金額はマイナスとなる月が多かった。

（注3）店舗で購入して家に持ち帰り、食事をする。また、その食品のこと。

図5 令和5年における牛肉の家計消費の推移（全国1人当たり、前年同月比）



資料：総務省「家計調査」

注1：購入数量および購入金額は1世帯当たりの数値を当該月の世帯人数で除して算出。

注2：消費税を含む。

注3：贈答用など自家消費以外のものも含む。

豚肉：牛肉からの需要シフトの他、普段使い商品が好調

豚肉の消費構成は、最大の仕向け先である家計消費が全体の消費量の約6割を占めてい

る他、外食・中食および加工仕向けがそれぞれ2割ずつとなっている。

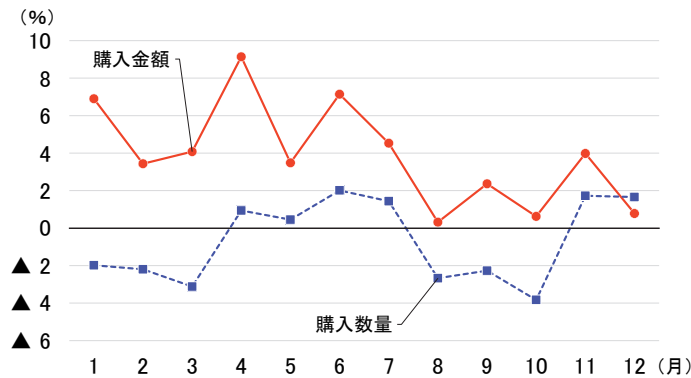
豚肉の令和5年の家計消費（全国1人当たり）を見ると、購入金額は、1年を通して前年を上回った（図6）。購入数量は、年の半分

は前年を上回った。

スーパー白書によると、精肉全般の相場高により買上点数の減少が続く状況の中、1月は国産品価格の高騰により輸入品の動きが好調であったが、2月は輸入品の価格高騰により国産品に需要がシフトした。4月以降は買上点数に回復傾向が見られた他、輸入品の

動きも良かった。また、牛肉からの需要のシフトがあった他、細切れやひき肉など普段使いの商品を中心に動きが好調な月が多く、前年と比較すると、牛肉と同様に購入数量は減少したものの、単価の上昇幅が大きかったことから、購入金額は増加した。

図6 令和5年における豚肉の家計消費の推移（全国1人当たり、前年同月比）



資料：総務省「家計調査」

注1：購入数量および購入金額は1世帯当たりの数値を当該月の世帯人数で除して算出。

注2：消費税を含む。

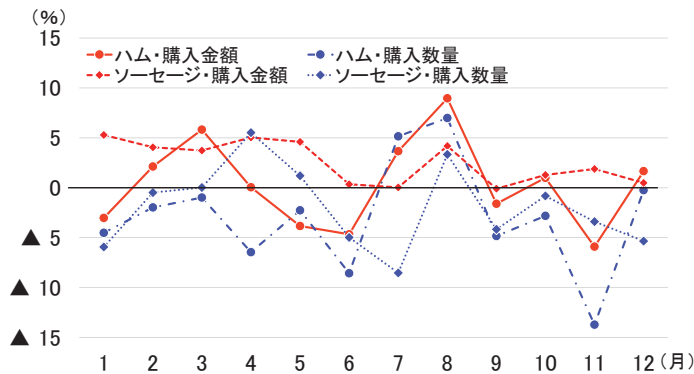
注3：贈答用など自家消費以外のものも含む。

ハム・ソーセージ：値上げの影響などにより購入数量は伸び悩む

ハムおよびソーセージの令和5年の家計消

費（全国1人当たり）を見ると、ハムの購入金額は、年の半分以上が前年を上回って推移した一方、購入数量は7、8月を除き前年を下回った（図7）。ソーセージは、購入金額

図7 令和5年におけるハムおよびソーセージの家計消費の推移（全国1人当たり、前年同月比）



資料：総務省「家計調査」

注1：購入数量および購入金額は1世帯当たりの数値を当該月の世帯人数で除して算出。

注2：消費税を含む。

注3：贈答用など自家消費以外のものも含む。

が9月を除き前年を上回って推移した一方、購入数量が前年を上回ったのは3～5月および8月の4カ月のみであった。

スーパー白書によると、ハムなどの加工肉は、値上げの影響でおおむね年間を通じて購入数量は伸び悩む結果となった。

鶏肉：購入数量の減少幅は小さく、購入金額は堅調に推移

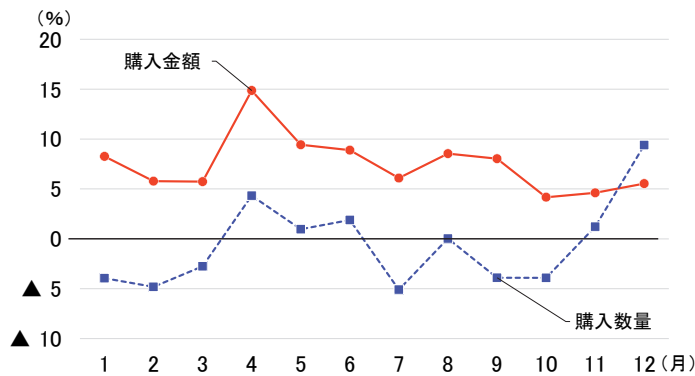
鶏肉の消費構成は、最大の仕向け先である外食・中食での消費が全体の消費量の約5割、家計消費および加工仕向けが約5割となって

いる。

鶏肉の令和5年の家計消費（全国1人当たり）を見ると、購入金額は1年を通して前年を上回り、購入数量は年の半分が前年を上回って推移した（図8）。

スーパー白書によると、年初は鳥インフルエンザの影響による価格の高騰や品薄があったものの、おおむね年間を通して値頃なムネ肉を中心に好調に推移し、購入数量の減少幅は小さかったため、購入金額は堅調に推移した。

図8 令和5年における鶏肉の家計消費の推移（全国1人当たり、前年同月比）



資料：総務省「家計調査」

注1：購入数量および購入金額は1世帯当たりの数値を当該月の世帯人数で除して算出。

注2：消費税を含む。

注3：贈答用など自家消費以外のものも含む。

（畜産振興部 大西 未来）